

## 書評 服部文昭著『古代スラヴ語の世界史』(白水社、2020年、208 + viii 頁)

青山 忠申

本書のタイトルに含まれる言語名「古代スラヴ語」は、古代教会スラヴ語あるいは古代ブルガリア語といった名称でも知られている。むしろ日本においては、古代教会スラヴ語と呼ばれることの方が多く印象さえ受ける。その理由は、著者自身も本書の冒頭で書いているように、この言語が「聖書の翻訳や宗教的活動に用いられる文章語であったからである」(5頁)。古代スラヴ語という名称に関しては、あまりに漠然としているため適当ではないと指摘する研究者も存在する。<sup>1</sup>それでも著者はここであえて古代スラヴ語という用語を選択している。それには本書の目的が関係しているだろう。ここではこの言語が宗教的活動に用いられたという側面に主眼が置かれているのではない。古代スラヴ語を主人公として、この言語が歩んだ波乱に満ちた旅路に沿って、この言語が誕生した9世紀後半から各スラヴ人の間で、この言語が変容した結果として終焉を迎える11世紀末にかけての、およそ2世紀半の道のりを読者と共に辿ってゆく、というのが本書のプロットである。無論、この言語の発生や伝播の動機付けとしてキリスト教の布教があったのだが、それよりもスラヴ人という単一の起源をもつ一派にとつての共通の文章語であるという側面が重要なのである。本書出版の前年の2019年は古代スラヴ語を創出したコンスタンティノスの没後1150年にあたるが、日本においてはそもそもその事績すらあまり知られていない。そうした中で一般読者向けに平易な文章でわかりやすくスラヴ語を取り巻く世界の歴史を紹介したことも本書の意義である。

本書は全11章から構成されている。各章の末尾には本文に関連した補足的な事柄を解説したコラムが配置されている。本文はきわめてわかりやすく簡潔に書かれているため、その内容に満足できない読者はコラムを読むことでさらに深い知識を得られるだろう。たとえば第六章と第七章のコラムには、キエフ・ルーシにおける最初期の写本と古代スラヴ語で書かれた写本のうち主要なものが所在地などの書誌情報とともに列挙されている。本書のように入門的な性格の書籍にこれほど詳しい記載は必要あるのかと疑問に思わなくもないが、気軽に参照できるこれらの情報は非常に便利で、また第七章のコラムの最後に、ウェブ上で写本の公開が進んでいることに触れられており、実際に写本を眺めるといった楽しみに誘ってくれる。

第一章では、古代スラヴ語が誕生する契機を与えたモラヴィア国が成立した過程と、それを取り巻く国際情勢について述べられている。古代スラヴ語の盛衰を辿るうえではいわば前史にあたる。ヘブライ語とギリシア語という聖書の言語、そしてラテン語での典礼、聖書理解が主流となっていた当時のキリスト教にあって、民衆にも理解できるような言語の使用が認められたことは、本書にもあるように重要で、極めて意義深いことである。無論、それ以前にもゴート語やアルメニア語への聖書の翻訳は行われていたが、時代により、またその時々々の権力者により典礼に際しての民衆語の使用に対する抑圧や反発は様々ありつつ、西方教会では

<sup>1</sup> 高津春繁『印欧語比較文法』岩波全書、1954年、18頁および木村彰一『古代教会スラヴ語入門』白水社、1985年、16頁。

宗教改革を経験してようやくそうしたことが認められるようになっていったのである。9世紀という比較的早い時期にスラヴ語による典礼が認められたことは、その後の東欧諸国におけるスラヴ語文化の発展につながった。

第二章では、モラヴィア国の要請により派遣されたメトディオスとコンスタンティノスがいかなる人物であり、いかんして古代スラヴ語を創っていったかが詳しく語られる。スラヴ人の言語にとって非常に大きな意味を持つことになる二人の兄弟メトディオスとコンスタンティノスは、モラヴィア国のロスティスラフ侯の要請に応じて派遣された。この二人がスラヴ人に対するキリスト教の伝道を担う者として適任であったことは、彼らによって訳された古代スラヴ語の書物を一冊でも紐解けば納得できるが、本書で描かれているように、二人の経歴からすでにその妥当性が確かめられる。まさにこの二人を選出したビザンツ皇帝ミカエル三世とコンスタンティノープル総主教フォティオスの目に狂いはなかったのである。コンスタンティノスが考案した文字体系の水準の高さから判断して、モラヴィアへの出発直前の短期間のうちにそれが完成したのではないという考察は興味深い。「おそらくコンスタンティノスはモラヴィアへの出発が決まった862年より以前から、何らかの理由で、兄メトディオスやスラヴ人の弟子たちと協力して、かなりの時間をかけて、文字体系をある程度の形に仕上げているものと考えざるを得ない」(40頁)。そうしてコンスタンティノスは主にギリシア文字のミノスクラ体をもとにして、さらにギリシア語にないスラヴ語の音を表すために創意工夫を重ねてグラゴール文字を考案した。

第三章では、メトディオスとコンスタンティノスによって構築された古代スラヴ語がモラヴィア国において根付かなかったことが、そして第四章と第五章ではその後の古代スラヴ語がブルガリアで受け入れられ、この地で花開いていく経緯が描かれる。第五章で描写されているように、このブルガリアにおいて考案されたキリル文字は、現代のスラヴ語派の諸言語における筆記体系に継承されている。ひと昔前なら、そして現在でも少なからず、コンスタンティノス＝キュリロスがキリル文字を考案したという言葉がききやかれることがある。このように、ややもすれば混同されがちなグラゴール文字とキリル文字の先後関係についても第五章で解説され、後世の研究におけるその論争については第九章で詳しく語られる。

第六章では、ビザンツ帝国によってブルガリアが征服されたためにこの地を追われた古代スラヴ語が新たな安住の地として見つけたキエフ・ルーシについて、その誕生の経緯とキリスト教との邂逅、そして古代スラヴ語を受け入れていく過程が描かれる。キエフ・ルーシの誕生と発展の様子は『原初年代記』に記述され、本章もその内容に依拠している。ところで、この章の表題は「古代スラヴ語の終焉」である。せっかく三つ目の安住の地を見つけたかに思えた古代スラヴ語だったが、その安寧は長くは続かなかった。キリスト教を国教としたキエフ・ルーシは、「威信のある」言語として古代スラヴ語を受容した。しかし、キエフ・ルーシにおいて形成された超地域的で統一的な文章語は、古代スラヴ語そのものではなく、その土地のスラヴ人の言葉に強く影響を受けた、「古代ロシア文語」だったのである。著者は、その過程でそれまでの古代スラヴ語が吸収され消滅していったと考え、このような事実をもって「古代スラヴ語の終焉」と表現している。「このように古

代スラヴ語が、元来の古代スラヴ語ではなくなり、地方的変種として生まれ変わる時、それは古代スラヴ語の消滅、終焉と言える」(103頁)。

第七章では、この「終焉」についてより詳しく書かれている。というのも、すでに古代スラヴ語とその土地の言葉との乖離が大きくなってしまっていたキエフ・ルーシの場合と異なり、それ以前から古代スラヴ語を使用していたスラヴ人地域においてはその土地の言語の影響を受けつつも古代スラヴ語としての形をもうしばらくは保っていたからだ。一度形成された伝統は、特に旧来の信仰を保とうという力が強く働いている場合には、なかなか崩れないものである。それでも時代が下るにつれて聖典を書き写す作業が繰り返されるうちに、古代スラヴ語はそれぞれの土地のスラヴ語の影響を受けてしまう。しかし著者も指摘しているように、こうした事実をもって古代スラヴ語の終焉と見るのは後世の研究者の視点であり、当時実際に聖典を書き写していた人々にとっては古代スラヴ語の伝統は脈々と受け継がれていた。ここまでで古代スラヴ語が歩んできた道のりを辿る旅は終わり、第八章以降の章はスラヴ語やその研究について、少し専門性のある内容の解説に移ってゆく。

第八章では、スラヴ人を包括的に捉え、今一度スラヴ人がどのような民族なのかという説明が詳しくなされる。著者はスラヴ人が「スラヴ語派に属する民族」の総称であるとする辞典類の表現の正確さを指摘する。言語学上の概念である語派は民族や人種とは直接結びつけることができないからだ。それでもなお、スラヴ人を特徴づけるのはやはりスラヴ諸語という彼らの用いる言語である。この言語をもとに、より正確に言えばこの言語に含まれる種々の語彙が印欧語から継承されたものであるか、スラヴ語独自のものであるか、あるいは借用語であるかをもとに、研究者達はスラヴ人の原郷について考察しているが、著者はそれがオーデル川、バルト海、ドニエプル川、ドナウ川で区切られた地域であるという説を支持している。

第九章では、チェコのヨゼフ・ドブロフスキーに始まり、現代まで続くいわゆるスラヴ学の研究史について言及される。ここで19世紀のスラヴ学界限で注目された問題として取り上げられるのは、先述したグラゴール文字とキリル文字の関係と、古代スラヴ語がどの地域のスラヴ人の言葉に基づいて考案されたかの二つである。本章を読めば、当初見つけていた資料の少なさのために著名な研究者達の間で誤った結論、すなわちキリル文字がグラゴール文字に先立って考案されたというのが定説であったが、古い時代のグラゴール文字文献の新たな発見によってその定説がひっくり返される経緯がよくわかる。二つ目の問題については、今日定説となっている、マケドニア地方のスラヴ語が古代スラヴ語のもとになったという説のほかに、スロヴェニア人のコピータルが主張した「パンノニア説」が多くの賛同を得ていた。『「パンノニア説」を主張する学者たちは、古代スラヴ語の確立に際しては、今日のスロヴェニア人の祖先の言葉が大いに貢献したと述べるのである」(161頁)。スラヴ学のように幅広い民族・国籍の研究者が携わる分野においてはままたる話かもしれないが、いくら研究者が学術的に正確な成果を得ようと努めても、自らの民族の正統性を明らかにしたい心理が表出しているようで興味深い事例である。

第十章では、各地域で同一の言語が話されていたと考えられる共通スラヴ語の時代から、時代が下るに

つれて西スラヴ人、南スラヴ人、東スラヴ人の間でどのようにそれぞれ特有の言語が発達していったのかを、近隣の他民族との接触や抗争の歴史から辿ってゆく。いわば古代スラヴ語の子孫にあたる各言語がどのような道を歩んでいったかを記した、主要な物語が終わったあとの後日談的な章である。本章のコラムは、共通スラヴ語から各方言群がどのように分化したかを示すために、いくつかの語形を用いて代表的な音変化を解説し、簡単なスラヴ語の音韻史の講義のようなかたちになっている。ここで挙げられている具体例は各方言群の分類の基準になるようなもので、記憶に値する。

第十一章では、現代のスラヴ人の各言語において、宗教的な要因によりキリル文字とローマ字という二種類の表記がそれぞれ使われていることが記述される。本章ではそれまでの歴史を、各言語と宗派の受容との関係に絞って再度振り返る。西方キリスト教を受容したスラヴ人がローマ字を使用するようになったのに対して、東方キリスト教の信者がマジョリティーを占める地域ではキリル文字に由来する表記体系が定着した。中には、2006年にキリル文字が国家の公式な表記体系に定められたものの、ローマ字も未だ公的に使用されることが認められているセルビアのように複雑な状況にある地域も存在する。

本書にはさまざまな図版が掲載され、読者の便に供している。たとえば、43 頁にはグラゴール文字の一覧がそれぞれの文字の音価と数価とともに掲げられ、131 頁にはグラゴール文字で書かれたアッセマーニ写本の一片の写真が載せられており、読者はかなり傾注すれば、この写本を解読することができないこともない。このような試みも、本書ならではの楽しみ方のひとつだろう。しかし地図に関しては 11 頁に掲載された 9 世紀半ばのスラヴ世界とその周辺を収めたものしかない。本書のように多くの地名が登場し、各地間での移動が描かれる場合には、要所要所で、たとえば「スラヴ人たちの使徒」の行程の記述に際して、それを俯瞰できるような地図があったほうが、状況を想像することで、本書の内容の理解がより容易になったかもしれない。とはいえ、これが本書の重大な瑕疵とは言えない。扱われることの少ないスラヴ語を取り巻く世界の歴史について一般読者が興味を持ち、その概略を知る上で、本書は十分な役割を果たしているだろう。

(あおやま ただのぶ)